

2. 戦国期城下町としての豊後府内と臼杵

小島 道裕

国立歴史民俗博物館 歴史研究部助教授

はじめに

大分県を代表する戦国期の城下町としては、大友氏が自らの本拠地として築いた豊後府内と臼杵をまず挙げることができ、また、特に豊後府内については、近年大規模な発掘調査によって、急速にその実態が明らかにされつつある。ここでは、その城下町としての構造について、最近の見解を整理しながら、若干の考察を行ってみたい。

(以下、豊後府内については、発掘調査報告書、現地調査説明会資料、および現地での調査担当者各位から多くの御教示を得た他、大分市教育委員会・中世都市研究会2001、および鹿毛敏夫2003を特に参考にした。臼杵については、神田高士2003と同氏の御教示によった。)

府内古図と地籍図による復原

豊後府内については、その最終時期を描いた古図が残されており、これと明治期の地籍図によって、復原想定図が作成されている(『大分市史』中巻付図=図1)。この古図は、現在の大分市中心部となる近世府内城下町へ移転した後に、旧住人の記憶をもとに描かれたものと推定されており、地割りや近年の発掘調査とも基本的に合致することから、特に原図に近いA類においては、その信憑性はかなり高いと見なされている。(古図とその写本の分類については、木村幾太郎2000を参照。)

府内の成り立ち

これと発掘調査の所見をもとに府内の都市としての成り立ちを考えると、まず都市域の東端にある「上市町」「下市町」などを含み南北路は、大分川沿いに発達した市町であったと思われる、方位も他の南北路とは異なって、東に9度振れている。遺物としては、今のところほぼ15世紀以降のものしか出土しておらず、守護大友氏の制定した仁治3年(1242)の「新御成敗状」に見える「町」がここであるかは確定できないが、いずれにしても、この都市域の中では町として比較的早くから発達した部分であると言えよう。

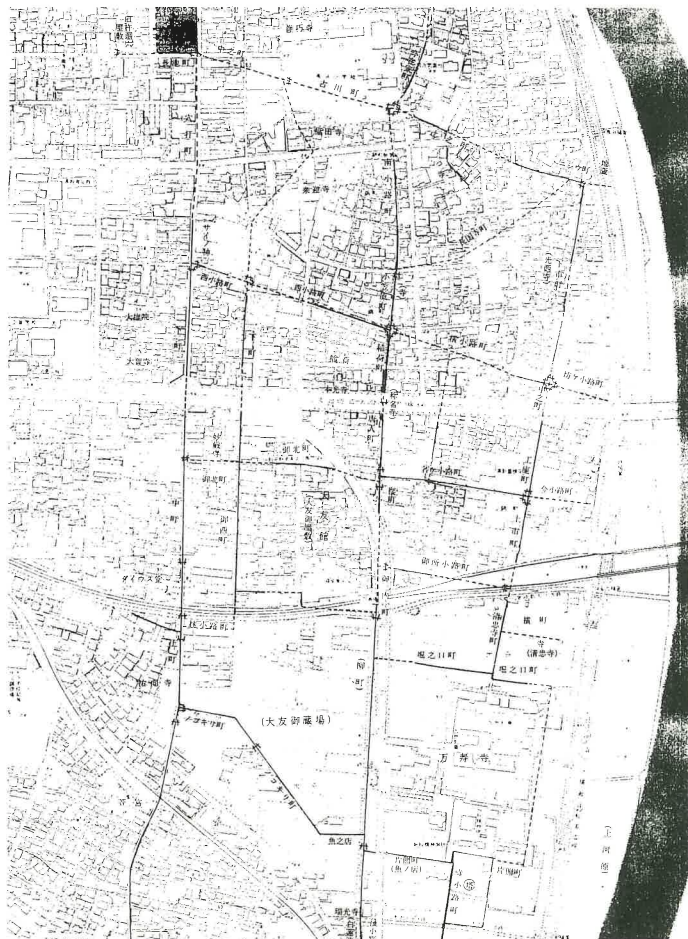
これに対して、大友氏の館がどこにあったかは、早い時期ではなお不明な点が多いが、古図に記された「大友館」については、文献的な徴証としては、大友義鑑の時期に当たる天文13年・16年(1544・47)に「土蔵」「乾屋敷」などの館の諸施設が、また義鎮期の天正元年(1573)には築地塀と思われる「土圀廻屏」の建設が命じられており、それぞれ、考古学的に確認された、16世紀中頃と後半の整地事業に対応する館の整備と見なされる。方2町規模の館が完成するのは、後者の時期である可能性が高い。

東から2番目の、館の東側に接する南北路や、館西方の南北路は、いずれも東に4度振れる方位で作られており、このような16世紀代の館の整備に伴って行われた区画整理と考えられる。

京都的な要素

以上の都市整備の結果、絵図に描かれた府内城下の中心部は、南北に4本の道路と、それに交差する5本の東西路からなる、やや歪んではいるが方形の街区を持った、京都的な格子状の区割りを持つに至っている。

大友館もまた、古図A類・B類では、京都の將軍邸などと同じように、礼門と脇門の2つの門が描かれており、また館内で検出された、16世紀中葉から後半に整備された広大な池も、やはり京都の将



第1図 戦国時代の府内復元想定図(『大分市史 中巻』より)

軍邸の構造になったものと言える。京都と同じ儀礼が行われたことを示唆する京都系かわらけも大量に出土している。

以上のような点から、16世紀中葉以降の府内中心部の整備に当たっては、京都が意識されていることは間違いなく、格子状の街路を持つことなどは、戦国期城下町の中でも、特に京都に近いものと言える。

そして、この中心部には、町を区切る木戸はあっても、明瞭な総構えの施設は見あたらず、また館の東向かい、すなわち門の正面に位置する「桜町」付近では、町屋と思われる屋敷群が検出され、武家屋敷と思われる屋敷跡も混在している。これらについても、一般的な戦国期城下町のイメージ、すなわち、館を中心に武家屋敷が広がりその周縁部に町が存在するという構造とは異なった、京都市的なものとする見解もある。

城下町と「計屋」

しかし、府内の構造は、やはり戦国期城下町の特徴として理解できる面も少なくない。

まず、都市の成り立ちとしては、東部の川沿いから発達した町の部分と、中央部の館およびその西に位置する部分とでは、基本的に機能ないし土地利用が異なる。館より西側の様相は、発掘調査ではまだ明瞭になっていないが、近世府内城下に移転した町が少ないことや、西端の南北路が、大友氏のもう一つの館である南方丘陵上の上原館に通じることから、大友氏の家臣団の屋敷が存在した可能性が考えられている。東側の町と館以西の地区の間は、本来空地だったであろう。

館の正面向かい側に位置する前述の「桜町」などは、この後から充填された部分に属する町と思われるが、「桜町」の町屋群と考えられる一画の北端、角地の部分には、ひととき大きな、良質の陶磁器や秤の分銅を出土した一軒の家があることが注目されている。

大友氏の発給文書によれば、府内、臼杵、関（佐賀関）には、大友氏によって「計屋」が置かれていた。（天正16年（1588）6月28日大友義統関両浦掟書（若林文書、国立歴史民俗博物館1989、大分県立先哲資料館2003所引。注参照。））。

計屋は、単に秤量を管理するだけでなく、府内へ出入りする地方の商人を管轄する立場にもあったことが知られており（年末詳11月9日田原紹忍書状（蜷瀬文書、大分市教委他2001所引））、商人頭的な存在と言える。桜町の北端で検出されたこの屋敷が「計屋」であったと断定はできないが、大友氏と関係の深い、商人頭的な存在であることは十分考えられる。

町立てと商人頭

当時の城下町建設においては、このような存在が重要な役割を果たした。狂言にも制札を立てて「市司」「商人の親方」を募集する、という筋立ての一群があるし（小島1995）、長浜の創設時の町年寄の一人で、近年屋敷地の発掘調査が行われた下村藤右衛門家は、当初城側から伸びる「堅町」として設定された町の、城寄りの部分の角地に存在した。江戸においてはより端的に、町の角地には草創名主の屋敷が置かれている（玉井哲雄1986）。このように、城主の意向を受けて、町を組織する際に重要な役割を果たした町人の存在は、戦国末期～織豊期ころの城下建設においては普遍的に認められ、府内においても、同じ方法での町立てが行われていた可能性が高い。（ちなみに、京都においては、町の角地には住人の需要を満たすための床屋が置かれることが多く、その光景はすでに16世紀前葉の洛中洛外図屏風（歴博甲本）に認められる。）

臼杵においても、臼杵川の対岸にあって早くからの商業地であったと思われる市浜の「里正」であった高崎氏は、天正6年（1578）耳川合戦で当主が戦死した後に掛町へ移ったとされており、「石敢当」を設置していることなどからも、家臣かつ商人頭的な存在として、町の再編成（凝集化）に参加していたと考えることができる。城下町の建設・再編にあたっての同様の事例の一つと見なすことが可能であろう。

凝集域の外

以上、大友館を中核とする府内中心部について、それが京都市的な様相を持ちながらも、やはり城下町的な構造を持っていることを見たが、そのことは、さらに広い散在的な部分も含めた府内全体で見るとより明瞭になる。

まず町屋地区は、対外交易の港としても知られる沖の浜が古絵図にも描かれており、また上原館の南方、古国府にも、性格はよく分からないが、16世紀代の町屋と考えられる街村状の集落がある。また、家臣団館については、大分川東側の下郡遺跡群などに方形館群があるとのことであり、この他確認はされていないが、上原館付近にもその可能性は考えられよう。

大友館付近の格子状街路を持つ部分は、全体として府内の都市機能を構成している散在する部分域の一つであり、それを大友館を中心に、凝集度の高い地区として再編したものと思わせる。

館の位置づけ―山城と平地居館

この地区以外の要素で特に注意すべきなのは、大友氏のもう一つの館である上原館である。発掘調査の所見では、年代の上限は15世紀後半とされ、また16世紀末には、大規模な土塁と堀が構築されている。先述のように、府内西端の南北路の上町・中町・下町などはこの上原館につながっており、主従制的な軸線を構成していたと考えられるが、府内凝集域にある「大友館」との関係はどう理解すべきであろうか。

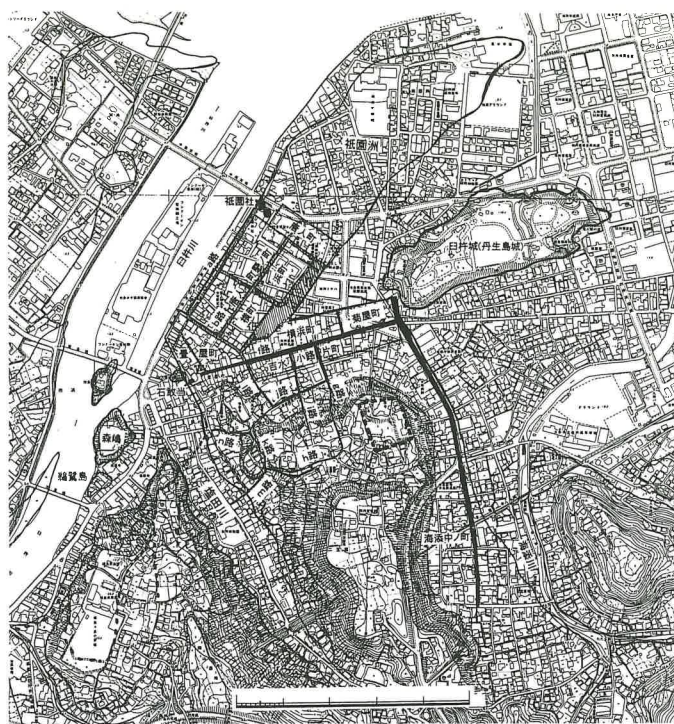
私見では、これは当時の大名や有力国人の城に普遍的に見られる、山城と麓の館の使い分けに相当すると思われる。

すなわち、毛利氏の郡山城、六角氏の観音寺城、斎藤氏と織田信長の岐阜城、あるいは越後上杉氏の春日山城と直江津にある方形館（至徳寺遺跡・御館）など、16世紀前葉頃から、大名権力は平地の方形館から山城に移っており、山上を日常の生活空間、麓の館を公的な政庁として使い分けている。大友氏の場合も、義統は上原館で生まれ、義鑑が殺害された「二階崩れの変」も上原館が舞台とされており、大友氏当主の日常生活はこちらで営まれていたと見なせる。

また、臼杵についても同様の事を指摘できる。義鎮が住んだのは、町とはやや離れた島状の丹生島城であり、これとは別に、町に接し、家臣団屋敷が置かれた二王座の台地には、政庁が置かれていたと推定されている。この面でも、基本的には府内と同じ構造を持つということができよう。

おわりに

以上、大友氏によって平行して営まれた府内と臼杵という二つの城下町は、今後の発掘調査の所見などを加えつつ、さらに比較しながら考えていく必要があろう。またそれは、全国的なこの時期の都市建設の動きとも決して無縁ではなく、他の都市との類似性と独自性を見極めていくことも重要である。あるいはむしろ、飛躍的に情報が増えつつある府内は、他の都市にとっての重要な比較対象となりつつあると言えべきであろう。



第2図 文禄期臼杵町復元想定図（神田2003に加筆）

〔 〕は神田氏の想定する政庁の位置

（注）関両浦掟の「計屋」については、小島1989では、くずし字が似ているため「斗屋」ともしていたが、「計屋」に確定したい。また、織豊系の他の城下町掟に比べて、統制色の強いこの掟の内容も、都市の未発達を一因と考えたが、むしろ既に都市の発達があり、その再編成を目的としたためと考える方が妥当かもしれない。

<引用・参考文献>

- 大分県立先哲資料館2003『大友水軍一海から見た中世豊後』（展示図録）
- 大分市教育委員会・中世都市研究会2001『南蛮都市・豊後府内』
- 大分市史編纂委員会1987『大分市史 中』大分市
- 鹿毛敏夫2003「戦国大名館の建設と都市—大友氏と豊後府内」『日本歴史』666号
- 金子拓男・前川要編1994『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み』名著出版
- 神田高士2003「文禄期臼杵町を復元する」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 木村幾太郎2000「府内古図再考」『府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』IX、大分市歴史資料館
- 小島道裕1989「豊後若林家文書の舞台」『中世の武家文書—館蔵資料から』（国立歴史民俗博物館企画展示図録）
- 小島道裕1995「楽市令と制札」『日本国家の史的特質 近世・近代』思文閣出版
- 玉井哲雄1986『江戸—失われた都市空間を読む』平凡社